

## デボラ・フォーゲル『アカシアは花咲く モンターージュ』

真島 亮吉



デボラ・フォーゲル著 加藤有子訳

アカシアは花咲く モンターージュ (松籟社 2018年12月)

## 1. 匿名の物語

詩と小説、そのあわいをゆく文章によって紡ぎだされた作品というものがある。ロシア文学にも、韻文の形式をとった小説ということ言えばプーシキンの『オネーギン』、逆に散文の形式をとった詩で言えばツルゲーネフの一連の散文詩が挙げられる。当然ながら、他の地域に目をやれば、小説の地平を一層おしひろげようと試みた、実験的ともいえる作品はさらに枚挙にいとまがない。日本で言えば一葉の『たけくらべ』あるいは漱石『草枕』といった作品も含まれるかもしれない。そればかりか、特にある都市を描いた作品という意味では、萩原朔太郎『猫町』を思い起こさずにはいられない。まさにここで取り上げる書物も、広い意味での都市小説として判ずることができるからだ。

デボラ・フォーゲル（1900－1942）の書『アカシアは花咲く モンターージュ<sup>1</sup>』（イディッシュ語版 1935 年、ポーランド語版 1936 年）も小説としては実験的であると言え、たとえば登場人物はみな匿名性を帯びている。収録された三編のうち「アザレアの花屋」では、人物は何人も現れては去っていくものの、彼らに物語はなく、描写されるのは一過性・一瞬の風景のみである。彼らは「人間」「人びと」「通行人」などといった素っ気ない名称を与えられるのみで、時々「女性」「淑女」「研修生」というぞんざいな色づけがなされるのみである。二編目の「アカシアは花咲く」に至っては、ほとんどのページで活躍している者とはいえば「マネキン」「人形」「トルソー」にまでその抽象化の純度が高められている。

そして人生に関する（あくまで断片的な）考察が現象学めいたまなざしをともなって遂行されている。その際、執拗に言及される色（灰、銅、黄、青、……）は読者の前面へせり出て視覚に訴える。色が形容する対象は必ずしも物体に限らない。灰色は中でもフォーゲルが殊に繰り返す色彩で、「灰色の一日」「灰色の出来事」「灰色の凝縮した雫」「灰色の身振り」などの、まるで共感覚を思い出させる句にしばしば出くわす。

もう一つこのモンタージュを彩っているのは素材である。素材とは文字通りの素材で、「鉄」「石灰」「粘土」「ガラス」「木」「板金」「タイル」「石」「レンガ」「ブリキ」といった建造物の元素となるものが、とりわけ最後に収録された「鉄道駅の建設」において繰り返される。そこでは、ゆるやかに建設の過程を追いながらも、もろもろの素材への偏愛があふれ出ている。

そして人生についての作家による着想。三編を通して「人生はやり遂げられなければならない。人生にあるべきものをすべて書き込まれた秩序通りに、然るべき時に（中略）。それでも、すべてがやり遂げられることはない。いつも、死が果たされずに残る<sup>2</sup>」「生の粘着質の原料が自分の運命を待っている。世界には、まだやることがあるのだ。いたるところに巨大な束となって転がり育ってゆく人生を、ただ引き受ければよいだけ<sup>3</sup>」といったどこまでも冷徹で美しい箴言が紡がれる。

フォーゲルの観察は、視界に入ったあらゆるものを細かい要素へと微分し、さらにその中からこれと思われるものを丹念に観察し拾い上げていく、という一連の行為に収斂している。たとえば普通の小説では、「樹木」を描写するにしても、その木の品種によって言いあらわすか、あるいは複数の「並木」などというおおざっぱな言葉に押し込んでしまい、一度書き記してしまえば、その樹木を二度と振り返ってみることはない。しかしフォーゲルは執拗にその樹木を登場させ、読者の前で色を塗って見せ、場合によっては一枚の葉にまでクローズアップする。「葉っぱとなって、悲しみがはらはら落ちてくる<sup>4</sup>」「木々は、人間を黄色い一枚の葉のような、黄昏と灰色の匂いで濁った哀愁の一片に変える<sup>5</sup>」といった言葉によって、情景が人生に寄り添うさまを綿密に抽出してみせる。「フォーゲルの最大の功績は、その描写が本当にモダニズム絵画に近いということだ。絵画的なのではなく、まさに絵画だ。彼女は言葉を聞くというより、見る<sup>6</sup>」と同時代の詩人アルクヴィットが述べたのは、まさにこういった側面についてである。

あたかも信頼できるのは色や素材といった細部のみであって、出来事や心情は描くに値しない、それらを極度に抽象化した人生のみで十分だ、と言わんばかりの大胆さである。ところがその姿勢はまったく乱暴ではない。なぜなら、本来他人の心情は推し量ることができず、したがって他人が経験した出来事をどこまでも正確に語ることなど不可能なのだから。別の者が語ればその出来事は偏向され、歪曲され、捏造される。まして当事者自身が語るなどもってのほか。客観性のかけらもなくなってしまうだろう。

したがって、そうした他者の集合体ともいえる都市は、フォーゲルが為したようにしか記述することはできないのだ。通行人をどれだけ眺めたとして彼らの人生に踏み入っていくことはできず、街の言葉から何かを読み取ったとしても、それはかりそめの情報に過ぎない。舞台となっているリヴィウの街も例外ではなく、この書物に匿名性をそなえた人物しか登場しないのはそのためである。記者者にできることは、観察者に徹すること。見ること、できるだけつぶさに見ること、そしてそれを積み重ねることによって人生にかろうじて触れること。それ以外にやり方はなく、しかしそれが最良のやり方でもあるのだ。フォーゲルは都市のそういった側面をとかく知悉していた。さらに、そのような意味において都市を描くことになれば、詩の持つ断片化・抽象化という特性を小説のなかへ取り入れることが奏功するということも。

## 2. 抽象的な作品、それを読むという経験

ポーランドの作家であり彼女とも親交のあったブルーノ・シュルツが執筆した書評で次のような一節が見受けられるのも、以上のようなフォーゲルの特徴をとらえてのことである。「作者は個々の出来事や個人的運命や個列の性格に対して感受性も敬意も持たない。作者が生のにかに発見した意味を例証するために、現実の素材を必要とすることもない。作者は完全に個人的な経験のかたちをとったこの状態を、それらの個々の具体性において経験することはない。<sup>7)</sup>」このシュルツの簡潔な一節を読んだとしても、フォーゲルの読者は決して悲観的になってはならない。具体性を排しているからこそその、読書の楽しみというものもあるのだということを私たちは喜ぶべきなのだ。

読書とは本来、極めて個人的な営みである。物語をたどりつつも読者は登場人物と自分自身を照合し、没入し、反発し、その果てに作家あるいは登場人物の価値観を学ぶ。したがって、本書を読む者は、具体性がないぶん、それだけ自分の経験を何重にもこの書物に投影させることができる。フォーゲルの箴言や匿名の人々の習慣を時間をおいて何度も読むことで、そのたびごとに私たち個人が持つ経験を照合するという自由が与えられる。具体性をもつ通常の小説では、この「そのたびごとに」というのは不可能である。具体性をもつがゆえ、私たち個人の解釈の余地は限定されるのだから。

したがってこの書物、いやフォーゲルは、批評家や文学者がこぞって（時には嬉々として）試そうとする「分析」をはねつけ、その試みを軽々とかわしている。アルクヴィットの書評には「これは詩人のための散文であり、（中略）そしてたしかにわれわれの批評家向けでもない<sup>8)</sup>」とある。そもそも文学者や批評家が分析をしようとすれば、客観性を担保しなければならない以上、私的な経験を盛り込むことは許されない。分析結果が他者に読まれる以上、作品の修辞や象徴を議論するなどして、それはどこまでも説明的文章でなければならない。だがフォーゲルはそれを許さない。フォーゲルは彼ら突き放し、純粹に個人的な読書体験のみを読者に求めている。したがって、本書について語るには、読者は自身の経験に照合したことまでも含めて語るしかなくなる。

しかしながら先述のとおり、読書という行為は本来、個人的な営みであるという側面がどこまでも付きまとう。逆に言えば、もしかしたらそこに「分析のために読む」という読書方法の限界があるのかもしれない。その限界があることも知らず一途に分析を進め、作品を理解した気分だけを味わっている文学者や批評家の浅薄さをフォーゲルは哄笑しているかのようである。

## 3. 参考文献

フォーゲル、デボラ『アカシアは花咲く モンタージュ』（加藤有子訳、松籟社、2018）

## 注

1. 訳者であり解説者の加藤有子氏によると、本書は以下のような経緯によって紹介されたものである。イディッシュ語作家としてモダニズム文学の系譜に位置づけられる稀有な存在といえよう。  
「シュルツ研究者以外には忘れられていたフォーゲルの名前が復活するのは、2006 年のことである。ポーランド語版短編集『アカシアは花咲く』(1936) が 70 年ぶりに再刊され、『アカシアは花咲く』以降に書かれたフォーゲルのイディッシュ語作品のポーランド語訳が紹介された。1936 年の『アカシアは花咲く』以降、文学から身を引いたかのように思われていたフォーゲルが、実はイディッシュ語作家として、作品発表の場をニューヨークのイディッシュ語文芸誌に移し、モダニズムの作家として注目されていたことが明らかになった」、デボラ・フォーゲル『アカシアは花咲く モンタージュ』(加藤有子訳、松籟社、2018)、p.186.
2. 同書、p.82.
3. 同書、p.116.
4. 同書、p.57.
5. 同書、p.60.
6. 同書、p.169. 解説に収録された B・アルクヴィット「現代的な散文」(加藤有子訳、『インジヒ』1935 年 17 号)より。
7. 同書、p.178. 解説に収録されたブルーノ・シュルツ「書評デボラ・フォーゲル『アカシアは花咲く』」(加藤有子訳、『われらの意見』1936 年 72 号)より。
8. 同書、p.170. 解説に収録された B・アルクヴィット「現代的な散文」(加藤有子訳、『インジヒ』1935 年 17 号)より。